

# 琉球大学学術リポジトリ

## 故郷で客死すること：『中屋幸吉遺稿集 名前よ立って歩け』論

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新城, 郁夫, Shinjo, Ikuo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/34165">http://hdl.handle.net/20.500.12000/34165</a>

## 故郷で客死すること —『中屋幸吉遺稿集 名前よ立って歩け』論—

新城 郁夫\*

### 1. 「名前」の前で

中屋幸吉。1939年沖縄石川生まれ。1959年琉球大学入学するも、その直後、石川市宮森小学校ジェット機墜落事件で姪が焼死し、安置所で傷ついた姪の遺体と遭遇し深刻な衝撃を受け休学。翌年の復学の後、ガリバン刷り個人誌「くずてつ」あるいは『琉球大学学生新聞』等で社会政治批評と詩作を試み「復帰」運動に参加していくが、1962年の旅を契機として「祖国」への幻滅と政治闘争による心身の傷を深め、1964年2月自殺未遂。文学に活路を見出していこうとするが、1966年4月自殺。享年26歳。『名前よ立って歩け』は、中屋の死後友人たちにより編まれ、「日本復帰」直後の1972年6月に刊行されている。中屋幸吉について、たとえば新崎盛暉は次のように戦後沖縄思想史のなかに位置づけている。いわく「中屋幸吉もまた、政治的主張においては、ひたすら反米民族主義の否定、階級的立場を強調し、インターナショナリズムの追及に終始している。しかしこの時期には、思想的変容とのかかわりあいながら、反復帰的な心情もまた形成されはじめていた」<sup>1)</sup>。

ここで新崎が指摘する反米民族主義の否定、階級的立場の強調、そしてインターナショナリズムの追及といった要素を、中屋のテキストに見出していくのは、あるいは困難ではないかもしれない。そしてまた、中屋が批評活動の拠点としていた『琉球大学学生新聞』そして琉球大学マルクス研究会を主導する1965年前後における山里章や古堅宗孝らの論考を参照し、『琉球大学学生新聞』と論争的協調を築く『琉大文学』側から積極的に介入する清田政信らによる論調を見てゆくならば、新崎が中屋に見出した政治的スタンスは、中屋その人の特性というより、当時の新左翼系列のある種の典型を示すものであったと言えるかもしれない。ただ、ここで問われるべきは、遺稿集『名前よ立って歩け』というテキストのなかの詩・日記・メモ・評論といった断片的な表現様式において、民族主義や階級あるいはインターナショナリズムといった概念や運動が、復帰運動と反復帰論との葛藤のなかでいかなる「思想的変容」を遂げようとしていたかという点であるはずである。後述するが、むしろ中屋は、1960年代前半の沖縄という具体的な歴史的

\* 琉球大学教授 Professor, University of the Ryukyus

政治的文脈における民族概念や階級概念が抱える不可避的な矛盾や未決性を、詩そして手記という形式で開示しているのであって、セクト的スローガンから逸れていく言葉と思考の矛盾の可能性を読み取ることによってこそ、中屋のテキストは現在化されていくはずである。中屋の言葉に促されて思考されるべきは、1960年の沖縄という時空間における「民族」「階級」そして「主体」といった概念に生じる底知れぬ亀裂であって、領土的そして主権的な例外状態が日米安保体制によって半永続化される軍事植民地状況下において、たとえば「沖縄人(琉球人)」が「日本人」とどのような差異を持つ民族として主体化され得るのか(主体化され得ないか)、そしてその主体化は基地経済の支配回路においていかなる階級として主体を主体たらしめることが(不)可能となるのか、そうした今に続くアポリアが、中屋の言葉とともに思考されなければならないだろう。そこには、いかなる意味においても、固有の民族性や階級的立場を自己同一性を根拠として名乗れる主体はいない。民族あるいは階級としてみずからの名を明示し、主体として自らを立ち上げようとするとき、自らの名前こそが一つの謎となり自分自身から遊離し自らをまなざし返す。「名前よ立って歩け」という言葉を書いてしまう者にとって、自明の名前があるはずがない。そこで、まずは、遺稿集のタイトルともなっている「名前よ立って歩け」という一遍の詩を読んでいきたい。

名前よ立って歩け

私の名前を  
小川の緑の草むらにひろげ  
青空のような安心  
とあそびにたわむれたい

にかよった水のながれ  
いつもの通り  
あくびしながらながれている  
この空は  
もうだれのものでもなくなった

私のすがたを残したまま  
名前が後へ後へと流れてゆく  
名前は  
さようならと言っている

あそびが冷や汗をかいている  
名前は

いっこうに生まれず  
しびれをきらした喪服は  
めいわくそうに笑おうか

ふりあげてみる山  
でっかいその身は空瓶のようにつつ立ち  
風がふきぬけているのに身を  
まかせているよ<sup>2)</sup>

まず、はじめに、この詩のなかの言葉が、「名前よ立って歩け」というタイトルそのものと葛藤あるいは抗争をはらんでいることに注目したい。「名前よ立って歩け」というタイトルに、自立あるいは主体性の確立への意志を読み取ることは困難ではないが、しかし、「私」は、初めから、「私の名前」を草むらにひろげ「安心とあそびにたわむれたい」という願いを記している。このとき、「私」は、私の名前が「私のすがたを残したまま」「後へ後へながれてく」のち、「いっこうに生れず」にいる新しい「名前」の訪れを待っている。「私」は「私の名前」が私を残して流れていくのを恐れているのではない。流れ去った後に生まれてくるはずの別の名あるいは新たな名が生まれてこないからこそ、みずからを解き放つための「あそび」が「冷汗をかいている」といえるのではないか。

「名前」が、「いっこうに生れず」にいることにおののく「私」は、同時に、自分の名前が自分に「さようなら」と別れを告げて流れ去っていく夢想に、みずからを委ねようとしている。後述するように、この書物における「名前」が、警察や司法からの尋問をはじめ、まずもって名指されることにかかわる傷みの記憶のなかで中屋のなかで想起されている以上、「名前よ立って歩け」という言葉は、自立や主体性の確立への意志というより、「私」に何者かであることを強制し、同時に何者かであることを禁ずる力から逃れ去ろうとする願いが込められていると読むこともできる。

ほどかれ、拡散し、水に流れ去っていく名前。ここで、この書名がいかなる意味でも、署名を持たないことに立ち戻る必要があるだろう。収録されたすべての文章に日付が記さるものの、決して署名されることのない言葉。ここに、「自立」あるいは主体性への模索と同時に主体化されることから逃れていこうとする運動をみていくことができるのではないか。そしてこのとき、米軍占領下沖縄における籍（「非琉球人」の場合は外人登録書指紋押捺）やパスポート（米国民政府発行の渡航証明書・日本政府発行の身分証明書）における署名が持つ社会的政治的強制力<sup>3)</sup>、あるいは強制的異性愛主義社会下における同性愛者の存在への否認やハンセン病患者たちの名前に加えられた暴力が想起されているはずである。そしてまた同時に、沖縄における敗戦直後の戸籍整備のなかでの改名のこと、名前が複数の呼び名あるいは通名を持つことの歴史的位相、婚姻や家督継承にかかわる女性の名前に加えられてきた沖縄社会のなかの暴力が想起されなければならないだろう。つまり、名づけられつつ主体化を拒まれそして時に名乗りを強制されるといっ

た、名前にかかわる痛みの歴史の想起への促しという契機において、中屋の言葉は強い喚起力を持つのである。むしろ、ここで求められているのは、名前を名乗らせる力を政治の暴力として感受する身体の働きであり、そして、名乗る手前にとどまりつづけ、名乗らせようとする暴力が生まれ出てくる場所を見つけていくことではないだろうか。

## 2. 非主体化する呼びかけ

中屋のテキストにおける「名前」をめぐる思考の特異な位相と運動を考えていくうえで、「呼びかけ」という契機は決定的に重要な意味を持っている。たとえば次のような言葉。

1964年2月27日の詩「幻視(2)」…「闇の中だった／音もなく／姿もなく／執拗に私の跡をつけてくるもの…／どこまでも ついてくる／昼になってもだ——／蒼くなって振り向くと／そいつは 一瞬／白く消えてしまう／不思議に勇気があったとき／闇の中で 突然／私の名をはじめて呼ぶのであった そいつは依然として／姿はなかったけど／怖ろしく不気味な雰囲気をもっていた」<sup>4)</sup>

1964年3月2日の日誌「日常の風景(2)」…「私が私自身の世界に閉じこもって、熊の冬眠のように無事に過ごしていると、突然、私の戸を荒々しく開けひろげ、大きな音をたててあがりこんでくるものがある、そいつのでかい声によって、私が自己の世界からようやくめざめると、私は、この闖入者のもってきた下界の眩しさに、しばらく眼をしばたいたのであった。今日も晩になって、その闖入者があった。黒っぽい精神をもち、黒っぽい雰囲気をもち、黒っぽい身なりのこの男は、私の目と鼻の先の所に坐って、しばらく無言のままである」<sup>5)</sup>

こうした中屋の言葉は、呼びかけが内面化される時、呼びかけられる者は、自らの心身において自らを拘禁し尋問し、時に統御できない懲罰的処置において自傷という暴力を自らに振るう契機をも予感させないではおかない。こうした呼びかけと主体化の問題機構については、次のようなアルチュセールの指摘が参照されなければならない。

イデオロギーは、われわれが呼びかけ Interpellation と呼び、警官（あるいは警官でなくとも）誰もがやっている「おい、おまえ、そこのおまえだ！」といった、きわめてありふれた呼びかけのタイプに従って思い浮かべることができるようなあの明確な操作によって、諸個人の間から主体を「徴募」し（イデオロギーは諸個人をすべて徴募する）、あるいは諸個人を主体に「変える」（イデオロギーは彼らをすべて変える）よう「作用し」、あるいは「機能する」<sup>6)</sup>

このアルチュセールの指摘する「おい、おまえ、そこのおまえだ!」という警察の「徴募」が、「諸個人を主体に「変える」その瞬間を、中屋はあやまたず、と言うより、アルチュセールが開示する呼びかけに関する理論的スケッチを凌ぐ具体的奥行をもって、拡散する声が干渉しあう関係のなかに描出し得ている。ただ、このとき重要なのは、警察からの呼びかけを聞き取りこれを反芻したたかに主体化され「徴募」されている中屋その人が、ほかならぬ主体化のそのプロセスのなかで主体の生成それじたいを禁じる力を感得し、この生政治的権力の恐怖を示唆しえていることである<sup>7)</sup>。中屋は、続けて書いている。

1964年12月30年の日誌…「確かに「政治」には違いないのだが、それが確かに私とは無縁なはずなんだが、その「政治」が私に近づいてきて、「モシ、モシ。貴方を反『政治』主義者として告発したいんだが…」というんで、私は思わず吹きだしてしまった」(中略)「一体、ケイサツって何者だね。人間ですらないんだろう… そんな怪物みたいな、いかがわしいものに人間が告発できると思っていますか」<sup>8)</sup>

呼びかけているものが、国家装置であるにしても、あるいは、具体的な誰かであるにしても、その呼びかけている何者かは、決して、その姿を見せない。この不気味な呼びかけの構図を描出する中屋の言葉は、サンフランシスコ講和条約第三条が極めて曖昧に暗示する「潜在主権」という、統治機構が分裂そのものにおいて機能する政治的「怪物」=リヴァイアサンの不可視化される暴力に、示唆的な形象を与えていると言うべきである。呼びかけつつ、応答することを禁じる「声」。この呼びかけは、呼びかけられる者の主体化を阻む力として記述されているのではないか。この呼びかけは、聞き取った者に分裂を強い、そして法的な例外状態への監禁を強制する力であり、ここで何者かであることを阻まれている主体は、この呼びかけを体内化することを要請されつつ、同時にこの声に振り向くことを禁じられる。名づけの原初的暴力(デリダ『グラマトロジー』)に関わって、名づけられた者が受忍する名の持つ力の痕跡が、ここに見いだされるのでなければならないはずだ。

沖縄の人間は、集成刑法を軸とする琉球列島米国民政府布令布告の超越性とそれに従属する琉球政府の法そして恣意的に変容する裁判権において浮上しては消える日本法との無秩序な法の雑居状態の下で「琉球人」という主体であることを承認され強いられるが、この主体は、自らの政治的未來を決定する権利を奪われている。たとえば、1964年4月28日に行われた「祖国復帰県民総決起大会」(沖縄県祖国復帰協議会主催)の決議には次のような言葉が見いだせる。「沖縄県民は、アメリカの大統領行政命令、布告、布令にしばられ、軍事覇権の弾圧と抑圧、さく取と収奪の専制政治支配のもとにおかれている。「指名性」にもとづく主席を長とする「琉球政府」もカイライであり、また、唯一の民選機関としての立法院も高等弁務官と任命主席の拒否件や小選挙区制のもとにおかれた軍事的植民地支配を実行する機関になろうとしている。アジア最大の基地の維持と強



化を目的とする米国の利益は、県民の生命と財産、生活と権利に優先し、県民の利益はことごとく踏みにじられている。いまや、政治的自由と民主主義はその幻想さえも消えた。キャラウェイの冷酷非情な「自治権神話論」はこうした正体をむきだしている<sup>9)</sup>。ここには、投票においてみずからが間接参加する代議制システムそのものによってみずからの自治権が否定されるほかない転倒のなかで、果たして政治的主体化はいかにして可能かという根源的な訴えがあり、高等弁務官による任命主席への承認という形以外の選択肢がない選挙において政治的行為を為すとき、その行為がただちにみずからの政治的主体化の篡奪への編入となるほかないことへの限りない絶望的な思いが湛えられている。そうであるがゆえに「政治的自由と民主主義はその幻想さえも消えた」という言葉が書かれねばならなかった。しかも、こうした「絶望」の背景には、主席公選要求を内部から崩壊させる動きとして、日本政府・自民党の小阪元外相（元自民党沖縄対策特別委員長）や大浜信泉早大学長らによる保守再結集の働きかけの画策を経てのちの沖縄自由党と民政クラブの保守連合による主席指名受託への方針転換があり、これを受けて、この年10月29.30.31日の立法院での文字通り流血の闘争になだれこんでいくという展開がある<sup>10)</sup>。

こうした文脈において、中屋の言葉が書かれ、そして、この流れを阻止しようとする尖鋭的な学生たちの主席指名阻止闘争デモ参加への懲罰的見せしめの行使である出頭命令という「呼びかけ」が、事実として中屋をはっきりと捕縛していたという出来事は極めて重大な意味を持つ。主席公選要求という自治権確立運動を主席指名の立法院議会での承認と警察行政執行の運営で切り崩しを狙いつつ、占領米軍と日本政府そして沖縄の保守勢力が現状を追認し合うという、沖縄の政治を侵食していく力が、この呼びかけに読み取れるのではないか<sup>11)</sup>。いびつに限定された主席公選制への参加の呼びかけにおいて、沖縄の人間は、政治的意思を示すことを促されるが、他ならぬこの呼びかけにおいて、政治的意思の発現そのものを侵犯され制限される。そして、応答しえる選択肢が始めから奪われたシステムのなかに監禁されている。

### 3. 「世界の内部にオキナワがあるとして…」という声

1964年12月30日の日誌…「政治の行方 今日まで、政治のありかたを求めて、四方八方、手を尽くして捜しまわったがついに見つからなかった。勿論搜索願いは出してある。／それが、ついこの前、やっと見つかったのだ。驚いたことに、その政治は、私の「内部」にあったのだ<sup>12)</sup>

自分の内部に発見された「政治」は、内部へ降り立っていく過程で、その内部そのものへの攻撃性を持ってしまう。抗争する局面を、自分の身体に折りこむことと、「政治」への要求が主体性の「止揚」ではなく崩壊として意識されていく変化。新崎盛暉は「64年6月には、労働運動、復帰運動、原水禁運動など革新的大衆運動のすべての面に深い

裂け目が生じていた」と指摘しているが<sup>13)</sup>、この裂け目にあつて、党派的駆け引きのなかにも居場所を持たず、「第二島ぐるみ闘争」とも言われる主席公選要求運動において、10月29-31日の阻止闘争に対する「出頭命令」を受け取る中屋にとって、政治は、「自己内部」への通路を見失う」過程として身体化される。あるいは、自らを見失うという出来事との不可分の共起性として「政治」が既成の認識枠組みもろとも見失われているのであり、それは「捜査願ひ」によって捕縛されるべき対象として未然のうちに求められるものとして政治とは何かという問いが開示されているというべきかもしれない。

こうした意識の変容の転機として「祖国日本」への40日間の旅があり、そこでの「幻滅」が、中屋の心身に深い傷を残していることに注目したい。

上京する二日前、1962年7月22日の日誌は、高揚する感情を次のように証言している。「『自己否定的論理』の確立。(中略)自らを変革の主体者に位置づけることによって、真の自己変革(創成)は、可能なのだ」(同書70頁)。この「祖国」において、中屋は、鹿児島で人の「色が白いこと」「声まで大きい」ことへの「驚異」を感じ、そして、「都会人=磨かれて、美しい。磨かれすぎてズルイ」といった錯綜した意識を書き記している。東京へ出て、様々な人々や事象に直面し、全学連幹部と語り合い倦み疲れ、疲労と幻滅がみずからの心身を傷つけていることを感受しつつ、その疲れを書き記す過程そのもののなかで、違和の集積する場としての自らの心身を、「オキナワ」そして「世界」との関係の軋みの場として再発見していこうとするのである。

1962年9月10日の日誌(沖縄へ帰る船のなか)…「40日間も暮した本土。東京での生活を通じて、常に死の意識の底にうごめいていたものは、沖縄であった」「現実的に私の精神的表現であるオキナワ、私の故郷のオキナワ。私がオキナワでなくなったとき、私は、何になるか。日本人か、国籍不明(正体不明)か。私の生みの親であり、もう一つの私であるオキナワ。私からオキナワがなくなる時があるか。私は、世界人であるべきであり、オキナワ人であつては、いけないか。世界をオキナワから見てはいけないか。世界の内部にオキナワがあるとして…。」<sup>14)</sup>

このとき、中屋が「世界をオキナワからみてはいけないか」と問いながら、同時に「世界の内部にオキナワがあるとして…」と記述するとき、オキナワが世界の内部に在ることへ疑念が開示される。オキナワは世界の内部に在るのかどうか。世界のなかの言わば消失点としてのみ沖縄は在り、世界はオキナワの抹消を通じて存在するのではないか。一九六二年という時において、沖縄は、そしてそこに生きる人間は、「世界の内部」で生きているとは言えないのではないか。この問いが中屋という個人の感慨というに留まらない広がり(「世界性」)を持つのは、「国籍不明(正体不明)か」という言葉において「私からオキナワがなくなる時があるか」という問いが、「世界人」たることへの希求と同時に提示されているからにほかならない。ここでは、オキナワと私との関係は、出自という絆あるいは民族的意識において同一性をもって語られているのではなく、



逆に、いずれも「世界の内部」に組み込まれた世界の外部（中屋自身が挙げている例でいえば「国籍不明（正体不明）」性として鋭く意識されているというべきだろう。主体であることを阻まれた「もうひとつの私であるオキナワ」に生きる者の政治的主体化の（不）可能性。この問いにおいて、日米安保条約の向こう側に、中屋自身が言及している例で言えば植民地独立戦争下のアルジェリアの人々を想像しその共振を書くことが可能となり、そして目の前の「敵」たる米軍において人種差別を生きる黒人たちへの連帯への希望を思うことが可能となる。「世界の内部」に折り込まれた世界の外部としての権利を剥奪された者たちによる政治の可能性への模索は、たとえば、中屋そのひとに、「ヤンキー・ゴー・ホーム」というシュプレヒコールの輪に加わらないという選択を促していく。中屋は書いている。

「祖国復帰運動は、一体どのように闘われてようとしているのか。それは平和行進の歌やシュプレヒコールに現れた「ヤンキー・ゴー・ホーム」の如く、全体としては反米民族主義の祭典として取りくまれんとしている。／だが連日新聞をにぎわしている米兵たちの催涙ガスの民間への投げこみやスーパーでの米兵同士の喧嘩、自動車の暴走、商店街への投爆に集中的に現れているように、犯罪を意識的に犯し、米軍留置所に送りこまれることによって戦争の地＝ベトナムへの派兵から逃れようと暴れまわる米兵やベトナムに死ににゆくんだと青ざめた或いはうなだれた表情で那覇軍港に運ばれてゆく米兵こそ、米帝の侵略戦争の道具＝武器にされている被抑圧階級なのであり、かかる米兵に「米帝戦争政策に反対し、反対闘争に起とう」と呼びかけようとしなないのみか逆に「アメ公帰れ」「ヤンキー・ゴー・ホーム」を怒号し、異民族への憎しみをもえたざらし、その民族的憎悪心で沖縄人民の解放がなされていいものだろうか。否インターナショナリズムとは全く無縁なこの「反米民族思想」で、人間（疎外された労働者、人民）の解放が実現できるのか。はっきりいって答は、否である。<sup>15)</sup>

先に引用したテキストとは別書において、新崎盛暉は、中屋に「典型」的に見られる1960年代前半の反復帰論の特徴を次のように論じていた。「六〇年代前半の反復帰的思想は、個人の内面においてはかなり強固なものになりつつも、決して、それ自体が、政治的表現をとることはなかった」。この場合、「政治的表現」という言葉そのものが再考される必要がある。中屋に関わって言うならば、むしろ「六〇年代前半」の沖縄という文脈における主流的「政治的表現」への否定性において、逆説的に、政治に新たな表現の地平を開こうとしている点が注目されていいだろう。その新しい政治の表現を単純化をおそれず言えば、非主体とされた者たちの主体化の共振作用といえるかもしれない。境界線の配置と参政権資格というモメントに集約されるような政治「的」表現が予め排除し、政治「的」闘争の舞台から抹消され主体の手前に留まり続けるものの現れを、詩あるいは断想という言葉の形式において生成させていく可能性にこそ中屋の思想の核心

にあり、そうであるがゆえに、中屋の模索する政治は、政治的なものへの再審闘争という局面を開いているといえる。ここで、人種は階級化される変容において思考され直し、階級は「呼びかけ」のなかで生起する現れとして再定義されている。その発見と概念の刷新においてこそ、中屋は「連日新聞をにぎわしている米兵たちの催涙ガスの民間への投げこみやスーパーでの米兵同士の喧嘩、自動車の暴走、商店街への投爆」という「集約的な現れ」のなかに、「派兵から逃れよう」とする者たちの傷をみとめ、これに呼応するみずからの逃走＝闘争を重ね書きすることを可能とするのである。ここには、アイデンティティの追認や配置における主体の政治とはおよそ異なる非主体による闘争の連帯が夢想される。しかし、この夢想は、やがて、コザ暴動で現実化されていく潜在性を秘めていたのであり、つねにして「犯罪を意識的に犯す」者による反戦の政治の地平が開かれているというべきである。戦争参加への国家からの呼びかけ（まさにアルチュセールが指摘する「徴募」）が日常を覆い、民族の名において戦列に立つことを強いられていく「世界の内部」において、兵士＝主体の戦列から外れるために犯罪を意識的に犯す者が現れはじめるとき、犯罪者は自らの犯罪をもって戦争犯罪を問うものたちへと変生し、国家と民族そして時として性の境界化を不全へと導く、ある新しい生の共同化として提示されていると考えることも可能である。この犯罪者たちは、なににもまして戦争から逃れ、敵前逃亡ではなく敵の側に逃亡し「敵」に匿われつつ「敵」とともに戦争そのものに戦争をしかけていく者たちであり、そうであるがゆえに、主権の論理において、もはやいかなる名をも持たない、主体ではありえない別のなにかである。

#### 4. 故郷で客死すること —「殺スノモ 死ヌノモ ムツカシイ」

##### 最後のノート

アメガフツテル アメガフツテル  
トオオク トオオク ニモ フツテル  
チイサイ チイサイ イノチノウエニモ  
アメハ ヤッパリ フツテル  
イシモ ヌレテイル  
ソラモ  
ユビノサキモ ヌレテイル  
ドウシヨウモナク イタシカタナク  
ヌレテユク

イマ  
カナシイトモ オモワナイ  
タダ

故郷で客死すること

ミヨウナ 深ミ  
エジプトノ ピラミッドノ  
アノ中ノ石棺ノ  
ワビシサガ  
ナントモ ジブンノ モノノヨウダ

あめ あめ あめ あめ  
あめふうり  
あめふうり  
喫茶店  
みんな おちてくる人だ

闘ウヤツハ 闘エバイイ  
生キルイガイニ 能ノナイヤツハ  
ヤッパリ ノコノコシテイイ  
モウ ダレニモ 会イタクナイ  
イキテイル奴ハ  
ボクト カンケイナイヨ

キミハ ソッチカラ オレヲナガメ  
オレハ  
コッチガワカラ  
キミタチヲ ミテイル

今日 エイガ ミタ  
小林旭ノ  
ボクトシテハ  
ヒトガ 殺サレテ シンデイク  
シュンカンノ描写ガ  
オモシロカッタ  
エイガデハ  
ミンナ タノシソウニ  
コウフク ソウニ  
シンデイク

ダガ ジッサイハ  
殺スノモ 死ヌノモ ムツカシイ

この詩が書かれたであろう時のほんの少し前に書かれたと推測される1966年2月7日の日記のなかで、中屋はこう書いている。「世界が立ち消えてしまった今、私は、私を含めたおおくのヒトの死体の、生への回復を信じたり、思いつくこともできない。否、かつて世界があったというハナシを、私は神話のように聞くだけだ。家出していくあてもなく、ここより少しましなあっちもなく、ましてや明日になれば…といった信頼心など、笑いばなしにもならず、否、「明日」というコトバがあるのを疑いたくなるくらいなのだ」(傍点原文)。そして、あえかな命脈を繋ぐようにして、「最後のノート」と時を同じくして書かれたと推測される「SAYO NARA」に次のような言葉を記している。「正直ニイマス——私ハイツモ時代ノ恐迫ヲ受ケテ居リマシタ 私ハイツモ時代ニソグワナイ人間ダッタ／イイエ単ニ 状況反映論カラノ 「自殺」トイウ名ノ「他殺」デハナナイ ツモリデス 少ナクトモ 私ハ本質的ナ意味デノ 「自殺」デアリタイ」。

自殺が他殺にほかならないこと。そのことを「時代ノ恐迫ヲ受ケ」ながら示唆していた中屋は、「こっち」側が、既に自分が帰属する場所ではなく、「こっち」側で自らによって殺されていく自殺＝他殺が、客死となることを感じて取っているのではないか。生のなかに死が折りこまれて、その死を自らという他者が強いるように、「こっち」側は同時に「あっち」側であり、そのいずれもが中屋にとって帰属しそこで自らの死が安住できる場所ではない。故郷あるいは故国にあって、人が、他郷あるいは他国を生きて死ぬこと、そのことを中屋の「最後のノート」は明らかにしている。そして、この故郷での客死という契機を介して、一般化は厳に慎むとしても、自分たちの生きる場所にありつつほかならぬその場において疎外され、確かな死に場所を持ちえなかった沖縄を生きる人間の歴史と現在を、国家(領土)に帰属しえぬ避難民たちの「横に開かれていく歴史」<sup>16)</sup>の影のなかに、この中屋の言葉を置き直して読むことができるのではないか。基地建设による強制退去そして難民化を強いられた沖縄の人間にとって、沖縄もまた他所なのではないか。「キミハ ソッチカラ オレヲ ナガメ／オレハ／コッチガワカラ／キミタチヲ ミテイル」という言葉は、コッチ＝沖縄とソッチ＝日本という、政治的、地理的、心理的な対峙性と境界線を示すというより、そのような対峙性あるいは相互主体化の契機を奪われている存在者にとっての、自らへの距離そして沖縄そのものへの距離として示されている<sup>17)</sup>。この言葉は、栗原彬が中屋に見出した「主体性」の問題からも逸脱していく抵抗を創出しているし<sup>18)</sup>、比屋根照夫が指摘する「政治への暗き情念と極限的に統一されたほのぐらい死のイメージ」<sup>19)</sup>の射程が、沖縄と日本との対峙に留まらぬ振幅における、主権の論理が捕縛し得ぬ非主権(者)の「権利への権利」(ハンナ・アーレント『全体主義の起源』)の政治の地平を開く。この政治は、政治を政治的境界線と参政権資格駆け引きの構図から解き、アイデンティティと諸帰属性に還元され得ぬ、未だ登記簿上に「名前」を持たぬ者たちを未然の共同性において繋ぎとめることになる。中屋は書いていた。——「日和見者。敗北者。逃亡者。変態者。裏切者。卑劣漢。妥協者。陰気

者。落伍者。自殺者。発狂者。これらの者に、ふかい、ふかい愛情をしめそう。ふかく愛そう」<sup>20)</sup>

中屋は、死を思念しつつ死を神秘化しない。むしろ、自殺することの絶対的な困難を言葉とすることで、生き延びていくことへの願いをなお書き記そうとする。

日和見者。敗北者。逃亡者。変態者。裏切者。卑劣漢。妥協者。陰気者。落伍者。自殺者。発狂者。これらは名前の手前に留め置かれ捨て置かれ遺棄されてきた者たちの、仮の異名である。これら名を奪われた者たちの生が、その潜勢的な共振作用を通して「私たち」自身を組み変えていく過程として言語化されていくとき、今の沖縄を規定する政治そのものが、中屋幸吉の読み直しにおいて批判的に問い直されていくことになる。

敗北者も変態者も自殺者も、それらは皆歴史のなかで政治的主体としての固有の名を奪われ「種族化」(ミシェル・フーコー『性の歴史I 知への意志』)されてきた者たちである。しかし、そうであるがゆえに、これらの者たちは、名づけられ得ぬ非領域的な運動体として現れ繋がり逃れていく亀裂となる。この亀裂において、沖縄という場を離散と参集とが重なりある場とする夢想のなかに、中屋の思想的問いかけの可能性がある。この亀裂の政治への模索がはじまるとき、沖縄を生きるという行為は、沖縄という共同体の排他性に抗いつつ、沖縄という統一性を破壊していくような非主体の離合集散する場として構想し、これをナショナルな同一性とも自己固有性と同一性の相互承認の場とも異なる、「変態者、犯罪者」たちの生き延びていく共同性の場として再構成していくことになる。「トオオク トオオク ニモ フッテル/チイサイ チイサイ イノチノウエ ニモ アメハ ヤッパリ フッテル」。近く遠くに降るこのアメは、故郷で客死していく無数の「チイサイイノチ」への、限らない歓待の知らせと言えよう。中屋幸吉の言葉は、この歓待の政治の始まりをこそ予示しているのである。

## 注

- 1) 新崎盛暉・中野好夫『沖縄戦後史』岩波書店、1976年、121頁。
- 2) 『中屋幸吉遺稿集 名前よ立って歩け』三一書房、1972年、2-3頁。
- 3) とくに占領期沖縄の出入国管理における日米そして沖縄の政治的配置に関する批判的考察を、「非琉球人」への対応を介して精緻に論じる土井智義の次の2論文を参照。「米軍占領期における「国民」/「外国人」という主体編成と植民地統治——大東諸島の系譜から——」(『法政大学沖縄文化研究 38号』2012年、385-432頁)、「米軍統治下の沖縄における出入管理制度と『非琉球人』」(富山一郎・森宣雄編『現代沖縄の歴史経験: 希望、あるいは未決性について』青弓社、2010年、133-158頁)。
- 4) 中屋前掲書、99-100頁。
- 5) 中屋前掲書、114-115頁。
- 6) ルイ・アルチュセール『再生産について イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』西川長夫訳、平凡社2005年、266頁。
- 7) 占領期沖縄における、「呼びかけ」に関わる生=性政治的位相についての考察として、新城郁夫「呼びかけの濫喩へ——ジュディス・バトラーのポストコロニアル批評」(『現代思想』34巻12号、2006年、214-226頁)を参照いただきたい。



- 8) 中屋前掲書、146-147 頁。「10・29-31 主席指名阻止闘争に対する出頭命令がくる」。
- 9) 沖縄県祖国復帰闘争史編集委員会『沖縄県祖国復帰闘争史資料編』沖縄時事出版、1982 年、174 頁。
- 10) 『読売新聞』1964 年 9 月 9 日の次の記事を参照、「政府・自民党は、さきの沖縄自民党の分裂によってもたらされた沖縄の政情不安に苦慮しているが、このほど白井務総務長官らを中心に対策を協議した結果、政府・自民党の関係者は沖縄出身の在京有力者を現地に派遣、保守勢力の再結集を呼びかける方針をきめた。まず小阪元外相（前自民党沖縄対策特別委員長）服部郵政政務次官（元党沖縄対策特別委員）高岡大輔元代議士（同）および古屋総務副長官を 11 日のマイクロ回線開通記念式典に出席させて、現地の関係者と事前接触させ、さらに今月末には沖縄出身の大浜信泉早大総長が沖縄を訪問するので、その際、大田主席と事態収拾を話し合ってもらおう。こうした動きと連動して、キャラウェイの後任のワトソン高等弁務官は次のような見解を示している。「主席公選、自治権の拡大などについては本土の都道府県自治と沖縄での自治を同一の立場で比較することは現実的ではない」（『朝日新聞』1964 年 11 月 5 日）。この認識を現実化すべく、ワトソンは、1966 年には、琉球上訴裁判所で係争中の 2 件（友利事件とサンマ事件）を、米国民政府（ユースカー）裁判所に移送する命令を出し沖縄で大きな反対世論を巻き起こしている。
- 11) この間の、ワトソン高等弁務官、佐藤榮作、三木武、ライシャワー駐日大使（当時）らによる「沖縄問題」についての政策的駆け引きと、沖縄内部での多層的な抗争については、宮里政玄『日米関係と沖縄 1945-1972』（岩波書店、2000 年）の「第 7 章返還交渉にむけて」229-279 頁を参照。
- 12) 中屋前掲書、148 頁。
- 13) 新崎前掲書、142 頁。
- 14) 中屋前掲書、96-97 頁。
- 15) 中屋前掲書、263-264 頁。
- 16) 屋嘉比取『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』世織書房、2009 年、iii 頁。
- 17) 新城郁夫「音の輪郭——高橋悠治の音楽とイトー・ターリの身体パフォーマンスを繋ぐ場所」、李静和編『残傷の音 「アジア・政治・アート」への未来へ』岩波書店、2009 年、21-41 頁を参照いただきたい。
- 18) 栗原彬『やさしさのゆくえ 現代青年論』筑摩書房、1981 年、81 頁。ここで栗原は、「中屋は、死のあらゆる意味付与を拒否して、主体的・能動的な自殺を貫き、その死によって彼と彼のオキナワを迫害するものの本体を告発している」と指摘している。しかし、中屋の自殺に「主体的・能動的」な「告発」という「意味付与」を為してしまっている栗原の指摘は、中屋の言葉が持つ主体批判の位相を捉えそこなっているように思える。
- 19) 比屋根照夫『戦後沖縄の精神と思想』明石書店、2009 年、264 頁。なおこの論考の初出は、「一つの終焉——沖縄戦後世代の軌跡——」であり、『中屋幸吉遺稿集 名前よ立って歩け』編集後記として収録されたものである。本論を書くうえで、この論考から多大な示唆を受けた。
- 20) 中屋前掲書、169 頁。

Death as a Foreigner in His Homeland:  
A Reading of Nakaya Kokich's Posthumans Collection  
*Namae yo Tatte Aruke*

SHINJO Ikuo

To this day, there has not been a sustained critical study of Nakaya Kokichi, a writer whose work illustrates a singular unfolding of intellectual thoughts in Okinawa under the US military occupation. My paper sheds light upon the political potential of Nakaya's thought through a close reading of his posthumous collection, *Namae Yo Tatte Aruke* (*Let Your Name Stand Upright and Walk*). In doing so, I pay particular attention to the three following aspects of his thought. First, Nakaya's texts reveal the violent nature of "interpellation" that sustains the system of the US-Japan military alliance. Nakaya's work exposes the ways in which such interpellation at once subjectivates those who live in Okinawa and, therefore, prohibits them from becoming a political subject. Second, Nakaya's writings critique the politics of Okinawan nationalist identity and seek an alternative political future in the solidarity among the non-subjectivated bodies. Third, as Nakaya's thought suggests a paradoxical possibility of *kakushi* or a death in a foreign land even in one's own so-called "homeland," it helps resituate Okinawa as an intersection of "refugees" who remain unable to belong to nation-states and of their "histories that open up laterally."

---